

④馬方（力をこめて）

「よいしょ、よいしょ、それ、どうだ。クリ公もがんばれ、よいしょよ。よいしょ、よいしょ、それ、どうだ。」
馬方は、荷車を押し上げながら、馬をばげました。
しかし、ますます田んぼにめりこんでいきます。

馬方「困ったなあ。どうしても輪が抜けないぞ。」



馬「ヒヒーン。おいらも力をいっばい出したのに、動かないや。おやかた、どうすればいいんでしょう。」

馬方「困ったなあ。どうしようかな？うーん。」
そんな様子を、村人たちが、遠くから見っていました。

⑤馬方「ああ、だめだ。動かない。だけれか、手伝ってくれる人がいないかな。（大声で）だんな方、手伝ってください。お願いします。」

村人1（隣にいる村人に向かって）「あなたは、力が強いだろう。手伝ってやりなよ。」

村人2「おれは、腰痛を起こしてな、痛くて手伝えないよ。お前がやれよ。」

村人1「おれは、えんりよする。た



する者がありません。

馬方「しかたがないや。米俵を降ろして、荷車を軽くしようか。クリ公。あとで、もう一度たのむよ。」
馬「おやかた、たいへんだけれど、がんばってくださいね。」

⑥馬方は、米俵を降ろしはじめました。馬「おやかた、せっかく、積んだのを降ろすのはいやですね。」

馬方「こうなりや仕方がないよ。クリ公は、ふんばっているんだぞ。」
馬方が米俵をかついで降ろし、二俵目に手をかけたその時です。



用事をすませた藤樹先生が、田んぼ道にさしかかりました。
藤「おやつ、荷車が田んぼにはまっているな。」

⑦藤「馬方さん。（大きな声で呼びかける）困っておいでのようですね。米俵を降ろすのは、たいへんでは

う。降ろさなくても、私が荷車を押しますよ。」



馬方「どこのどなたさまかは存じませんが、そのお姿では、着物が汚れます。自分で何とかやりますから。」
藤「力を合わせての方が、いいに決まっていますよ。汚れたものは洗えばいいのだから、遠慮はいりませんよ。」

⑧藤「馬方さん、私は、どこを押すといいのかな？」



馬方「だんなさま、ありがとうございます。それは、荷車のうしろから、力いっぱい、押していただきますか。」
藤「分かりました。そうしましょう。」

⑨藤樹先生は、荷車のうしろに回り

ました。
藤「馬方さん、押しますよ。それつ。よいしょ。それつ。よいしょ。すると村人のだれかが言いました。よいしょ。」



だめじゃないのか。」

村人3「それに、一人でも多い方がいいよな。」
村人達「みんなで手伝おうよ。」
⑩見ていた村の人たちも、急いで荷車の後に行きました。

みんな「よいしょ、よいしょ。もう少しだぞ。」

馬「ヒヒーン。荷車が軽くなったぞ。がんばろう。」



馬方「皆さん、もう少しで、ぬけそうです。」
（紙芝居を見ている子どもたちに向かって、「みんなも応援してあげようよ」と声をかけてもよい。自由に声援を送らせる。）

みんな「ソーレ。どっこいしょ。」
馬方「はあ。ようやく上がった。（大声で）よかつたあ。バンザイ。」